

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2018年

No. 82

2018年1月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 中山博邦
© JASE. 2018 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

第22回関西性教育研修セミナー報告 …………… 1	性教育の現場を訪ねて⑩…………… 14
第31回日本エイズ学会報告 …………… 7	今月のブックガイド…………… 16
Dr.上村茂仁の性の悩みクリニック②…………… 13	JASEインフォメーション…………… 17

◆第22回 関西性教育研修セミナー報告

スウェーデンとフィンランドに学ぶ、 知的障害児者への性の教育と支援・専門家養成

関西性教育研修セミナー実行委員会

はじめに

今年度（2017年度）、関西性教育セミナーでは「北欧における性教育」シリーズを企画し、大阪で開催された「肯定的で健康的な自尊感情とセクシュアリティを育むフィンランドにおける性教育と家庭（親）支援」（『現代性教育研究ジャーナル』2017年9月No78参照）に続く第2弾として、2017年10月22日に「スウェーデンとフィンランドに学ぶ、知的障害者への性の教育と支援・専門家養成」を実施した。司会は、前回に引き続き、土肥いつき氏（関西性教育研修セミナー実行委員／セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク副代表）が務めた。

昨年（2017年）8月に関西性教育セミナーが主催した「フィンランド・スタディツアー」の報告と、マルメ大学のシャーロット・ローフグレン・モーテンソン教授（社会福祉学／臨床性科学）による「スウェーデンにおける知的障害児者への性の教育・支援」、及

び会場とのディスカッションからなる三部構成であり、定員を超える申込みがあった。大型台風が迫るなか、会場の日本性教育協会セミナールームには全国から多くの参加者を迎え、熱気あふれるセミナーとなった。

フィンランド・スタディツアー

報告者／野坂祐子・吉田博美

フィンランド・スタディツアーは、2017年8月17日から8月26日の8泊10日の行程で、フィンランド国家教育委員会、ユースセンター（Happi）、HIV point、フィンランド国立健康福祉センター、LGBT Association Setaなどの施設訪問に加え、旧市街ボルボーでは初開催だというレインボーパレードへの参加、そして今回の主要な目的であるSexpo財団の性教育研修の受講を含む盛りだくさんな内容だった。

フィンランド国立健康福祉センターのKatrina Bildjusckin氏（セクソロジー教育者）によれば、フィンランドの性教育を素晴らしいものに行っているのは、

「学校制度」、「平等」、「サウナ」の3つであるという。そこでこの3つの点からフィンランドの教育と文化をまとめたい。

まず、「学校制度」について。フィンランド国家教育委員会 Satu Elo 教育顧問によれば、フィンランドの国家および自治体予算の11～12%が教育にあてられ、就学前教育（6歳）、基礎教育（7歳～16歳）、高等教育、大学はすべて無償である。就学前教育と基礎教育では、教科書や給食、遠隔地に住む児童の送迎にかかる費用も無償で提供され、成人に対する生涯学習にも手厚いサポートがある。学びたい意欲があれば、そのチャンスが与えられるように制度が整えられ、公平性が保たれている。皆に同じモノを与え、同じ条件で扱うのではなく、それぞれの違いや特性を踏まえて、情報や機会への公平なアクセスを保障することが重視されている。

2016年、10年に一度のカリキュラム改正が実施され、フィンランドの教育は国内外で注目を集めているところである。フィンランドの教育理念は「公平性 (Equity)」であり、「フィンランドに必要な国民 (Good Citizen)」を育てることが目指され、「ウェルビーイング」を促進する教育が推進されている。

この新カリキュラムでは、クロスカリキュラム・アクティビティが義務教育化され、「何を学ぶか？」から「どのように学ぶか？」を重視し、複数の教科にまたがった横断的な教育を行う時間を最低でも1回設けることが義務付けられた。これは、生徒と教員が一緒になって、それぞれ別の角度から様々な科目を混ぜ込んで分析、学習していくものであり、例えば、「地球温暖化」などの興味をひく現実世界のトピックスをテーマに選ぶと、数週間にわたって一つのプロジェクトとして学んでいく。各科目をリンクさせ、実生活で生かすことのできるスキルを身に着けることを目標とする。教室外でどのような教育が行われるかは学校や教員に委ねられているが、生徒は同じ教室にずっと静かに座っている必要はなく、どこで、どのように学びたいか、自分たちで選べるようになっている。

放課後は、誰でも参加できる安全な環境を提供するユースセンターがある。ユースセンターはヘルシンキ市による事業であり、ヘルシンキ市の若者支援予算は3000万ユーロ（約40億円）で、スタッフは公務員である。主たる利用者は13歳から18歳だが、9歳か

ら29歳の利用も可能である。民主的にプロセスを踏んで決めることが重視されており、安全のためのハウスルールやプログラム作りも、カウンセラーと子どもが話し合いをしながら決めるという。子どもたちから声が出たら必ず聴くことが環境省で定められており、子どもたちのプランの現実化を検討して、実践につなげる政治のプロセスを学ぶことを目的としている。

そして、「サウナ」もフィンランド文化の大切な要素である。ほんの少し前まで、女性はサウナの中で出産し、人が死ぬとサウナの中で遺体が洗われたとも言われる。つまり、サウナは肉体的にも精神的にも浄化の場所であり、人間のコアな部分を感じるための場所として存在してきたようだ。フィンランド人は知らない人と積極的に話すことをしない一方、サウナの中ではすべての人が平等で、知らない人同士でも深い話をすることがあるとか。誰かと一緒にサウナに入るということは心と心で話し合うことを意味し、「重要な決断は会議室ではなくてサウナでされる」という。

身体も心も浄化された心地よさや平等の感覚を持つことは、性教育に欠かせない要素と言えるのだろう。

Sexpo での性教育研修

Sexpo 財団は、1969年に設立され、約50年の実績をもつ、性的ウェルビーイングの促進を目的として活動する民間団体である。アンティークなマンションのワンフロアを占めるオフィスは、足を踏み入れると、カラフルでファッショナブルな家具やインテリアが目を引き、心地よい空間である（次ページ写真1）。

セクシュアルポリティクスに関するロビーイングが団体の中核的活動であるが、現在は専門家養成が主たる取り組みであり、性に関する教育者や支援者のトレーニングを行っている。また訓練を積んだセラピストによるカウンセリングやセラピー、ネット上でのアドバイスのほか、イベント開催や他団体とのネットワーキングなど、幅広く活動している。

スタッフやセラピストは11名で、このほか最低1年間のトレーニングを受け、アドバイザーの資格を持つボランティアが50人以上いる。年間650,000ユーロ（約8200万円）の資金の3分の1は公的資金である。2016年には、約1,000件の面談や電話による相談に応じており、ウェブ上での相談やアドバイスの件



写真1 Sexpo財団のエントランスロビー

数が増加中とのこと。

こうした活動のなかで、性教育の研修はフィンランドでもっとも歴史が長く、規模も大きく、Sexpo財団も「ベストな団体」との自負がある。トレーニングは、1グループ11名定員で、昨年度は計7プログラムが開講された。定員の3～4倍の申し込みがあり、現在は2グループを運営しているが、会場スペースが不足している状況という。年間約100人の受講者を教育している。

研修の内容は、「セクソロジー」「性教育」「セラピー」の3つのプログラムがあり、各コースの受講料は3,000ユーロ（約40万円）。すべて受講するには4年間かかる。これらのコースの修了証は、フィンランドの性科学学会から発行され、北欧ではSexpoでしか取得できない。

Sexpo研修の特徴として、座学に終わるのではなく、ピアグループによるグループ課題やSARの実習があることが挙げられる。SARとは「Sexually Attitude Re-assessment（性に対する態度の見直し）」であり、受講者自身が性に対する価値を自覚化することを通して、教育の対象者やクライアントを理解できるようにするものである。専門家として性の問題に関わるとき、緊張や不安を感じず、落ち着いて心地よく話せるようになること。そのためには、自分の苦手なトピックス



写真2 Sexpo財団のエグゼクティブディレクター、Tommi Paalanen氏

を自覚しておく必要がある。また、思い込みや決めつけ、偏見によって、あるセクシュアリティを否定的に語るができないようにするためにも、SARのトレーニングは欠かせないものとされている。

研修では、「性教育における価値と倫理」が強調され、若者の声をきちんと聴くこと、そして人の自立・自律を尊重すること、そのためにも教育者がどんな規範を伝えようとしているのかに自覚的になることの重要性が語られた。しばしば性教育は、健康教育とイコールで捉えられがちだが、たしかに性の健康の維持と向上は性教育の鍵である一方、健康以上に「どのように生きていくか」、「どんなふうに自己決定するか」が大切である点を忘れてはならない。つまり、ある一つの価値（たとえ「健康」であれ）を教えるのではなく、メタな価値を考える教育へと転換させていく必要がある。

若者の性行動については、しばしば「してはならない」という禁止のメッセージが用いられる。もちろん、幼い子どもには年齢に応じた一定のガイダンスが必要であるが、成長に伴い、若者の「主体性」を尊重すべきである。教育者や大人が「してはならない」という姿勢では、ダイアログ（対話）は始まらない。「どうして、そんなことをしたの？」と若者の声を聴くポジティブなアプローチが有益である。

スタディーツアーの研修のなかでも、受講した私たち自身が参加するワークショップもあり、「最初に受けた性教育の体験」を分かち合った。性に関する子ども時代の体験は、意識するか否かに関わらず、「性とはこういうもの」という価値観やイメージを作り上げている。性教育とはまさに、子どもとの対話であり、大人自身の「バウンダリー」を示す機会でもある。性

に対する対話のなかで、教育者自身が「それは話せない」と説明することも、子どもに教育者自身の境界線とそのパートナーとの境界線を示す姿勢になる。

そして、性教育は「キャッチ・ザ・モーメント」、つまり子どもが興味を示したり、発言したりした瞬間をつかむのが大切とのこと。性教育はどの年齢の子どもにも必要であり、教えるべき内容も変わらない。ただ、年齢や発達段階に合わせて、レベルを変えるだけである。「知識ではなくエモーション（情動）が重要」というメッセージは、まさに、研修のなかで感じた「安心、温かさ、好奇心」といった心の動きとともに実感することができた。

スウェーデンにおける知的障害児者への性の教育・支援（講演要約）

報告者／東 優子

次に、講演「スウェーデンにおける知的障害児者への性の教育・支援」の要約を報告する。北欧と一口に言っても、フィンランドとスウェーデン、デンマーク、ノルウェーの3国では、人種や言語学的系統をはじめとして、異なる点が多いという。

「ロッタ」の愛称で知られる講師のモーテンソン氏は（写真3）、知的障害分野のソーシャルワーカーとして勤務した後、大学院に戻って博士号を取得し、大学に職を得たという。WHOの性教育に関する委員会活動に携わり、IASR（性研究国際協会）の大会長を務めるなど、世界を舞台に活躍する臨床性科学者である。

勤務地であるマルメ市はスウェーデン第3の都市で、首都ストックホルムよりデンマーク・コペンハーゲン



写真3 セミナーの様子と講師のモーテンソン氏

に近く（車移動で20分ほどの距離）。そのため移民の割合が高く、2世や3世を含めれば人口の約40%にのぼるといふ。また、イスラム教徒の占める割合が25%と、北欧の中でも最も高い。人口動態が大きく変化したマルメ市は、「若々しさ」と「多様性」が特徴になっており、それゆえの様々な「新しい課題」にも直面しているという。

「ジェンダーの平等」はスウェーデン社会の基盤

性教育の長い歴史を誇る北欧の中でも、いち早く1955年に「義務化」を実現したのがスウェーデンである。20世紀初頭に性感染症の蔓延を経験し、予防・教育の需要が高まった。また、貧しい農業国で、子どもに満足のいく食事を与えられない「子だくさん」の家庭が多く、妊産婦・乳幼児死亡率も高かったことで、身体、避妊、性感染症などに関する知識を広めていくことが必要だと考えられるようになった。性教育は、保健医療の無料化、無料あるいは低額利用できる避妊手段へのアクセスを保障すること、中絶の合法化などと同じく、福祉国家を形成していく上での「鍵」と捉えられるようになったのである。

パイオニアの一人は、エリーゼ・オットセン・イェンセン（写真4）である。後に、スウェーデン性教育協会（RFSU）の創設メンバーとなる彼女は、無政府主義のジャーナリストであり、女性の権利運動およびフェミニズムに身を投じた。新しい社会にはジェンダーの平等が重要で、性教育は人権と分かちがたいものである、といった認識が定着していった歴史には、こうした「ファイヤー・ソウル（燃える魂）」たちの活躍があった。ジェンダーの平等は、今日の家族支援制度・サービスの基盤的価値である（世界経済フォーラム「ジェンダー・ギャップ指数」で、フィンランドやスウェーデンは常に上位5位にランクづけされている。一方、日本は2017年に114位まで下がった）。



写真4

時代によって異なる「問題」の焦点

それぞれの時代や社会情勢によって「焦点化される問題」は変化するものである。スウェーデンにおける性教育は、性感染症や望まない妊娠・中絶の予防が目的で始まったが、1960年代の「性革命」において、セクシュアリティが健康に重要なものであるとの認識もたらされた。避妊用ピル（OC）の処方が認可されたのも、ちょうどこの頃である。性に対するリベラルな社会的態度は1970年代になっても続き、「ジェンダーの平等」に関する議論がますます活発になっていった。

1980年代の性教育を特徴づけるキーワードは、HIV/AIDSである。「より安全なセックス」を教えることが性教育の中心的な課題になっていった。しかしその後、抗ウイルス剤が登場するなど、HIV医療が進歩したことによって、リスク管理的な内容からセクシュアリティをより肯定的に捉えた内容へと、性教育のニュアンスも再び変化している。

性教育への今日的批判と課題

21世紀に入って「リスク管理的な内容からセクシュアリティをより肯定的に捉えた内容へと、性教育のニュアンスにも再び変化が起こった」とはいえ、性差別的な言葉遣い、性暴力、ジェンダーの不平等、性に伴うリスクとその予防など、性にまつわる「問題」に焦点化した内容が多く、性をポジティブに学ぶ、語る機会は少ない。「性の健康 vs. 不健康」、「リスクのある行動 vs. 安全な行為・行動」、「禁止 vs. 合法」、「いいセックス vs. 悪いセックス」、「適切な行動 vs. 不適切な行動」といった、二項対立的な規範概念は根強いが、セクシュアリティはもっと複雑なものである。何が「望まない」、「予防すべき」ものなのか、誰にとって「望まない」ものなのかは、立場によっても異なる。そうした規範や社会的態度は常に変化するものであり、政策やガイドライン、法律や規制もまた同じである。

規範的な性教育は、異性愛やシスジェンダー（トランスジェンダーの対語）を前提としたものが多い。これでは、LGBT（スウェーデンでは、クィアの頭文字であるQを加えて、LGBTQと表記することが多い）が不可視化され続けることになる。

「義務化」されている性教育が十分に提供されていない、あるいはまったく提供されない層も存在している。疾病や障害のある若者たち、社会経済的弱者で、

少年院などに暮らす若者たちへの性教育である。幼い子どもたちへの性教育に関しても、これに反対する声がある。

その一例が、ペニスのウィリーとヴァギナのトゥインクルをキャラクターにした子ども向け性教育のアニメ番組をめぐる論争である。各放送回のエピソードは、実際に子どもたちから寄せられた身体に関する質問に基づいており、子どもたちが自分の身体の部分について学び、語ることを目的に制作された。タブー意識を払拭する「いい番組」だと評価する声がある一方で、内容が不適切だと反発する声もあり、YouTube（無料の動画共有サイト）が、一時的にこれを「成人向けコンテンツ」に指定する事態も生じた。

インターネットやソーシャルメディアの発達は、性を取り巻く環境を大きく変え、専門家に新たな課題をつきつけている。e-ラーニングやe-カウンセリングなど、新しい学習方法やカウンセリング形態が登場する一方で、巷には玉石混交の性情報がこれまで以上に溢れるようになった。ポルノグラフィへのアクセスが容易になり、子どもたちが見たくないもの、見るつもりのないものでも、目に飛び込んでくるような時代になった。

一方で、性教育の担い手の養成が追いついていないという問題がある。性教育が義務化されているとはいえ、独立した科目が存在しているわけではなく、たいいてい場合は、複数の教科（例：生物学、社会学、保健体育など）に統合化させる形で性教育が行われることになっている。ガイドラインが策定されており、性教育の目的は「若者が自身のニーズに基づき、自身のセクシュアリティに責任を持てるようになること」にあるとされている。セクシュアリティを肯定的に語ることで教育効果を高めることもわかっているが、教職課程での教科教育法など、教員のための教育は未だ不十分である。

さらに、性教育の内容が「一般化」され過ぎているという批判もある。多文化・多様化が加速し、今日の教室には異なる価値観や文化、あるいは異なる経験をもつ生徒たちがいる。「標準（スタンダード）」とされた教育が、個々の生徒のニーズにうまく適合するのは難しい。ちなみに、これまでスウェーデンにおける性教育について、宗教の違いが大きな問題になったことはなかった。しかし、移民が増えた現在、価値観が多様化するなかで、性教育の授業に生徒が出席しな



並行で矛盾する規範：「あの人、目元を除いて、全部布で覆われてるわ。男性優位文化にもほどがある。酷いものだね。」という白人女性に対して、「あの人、サングラスをかけた目元を除いて、全部むき出しだわ。男性優位文化にもほどがある。酷いものだね。」というムスリム女性を描いた風刺画

い（親がさせない）という、新たな問題も発生している。ジェンダーの平等や、ジェンダー／セクシュアリティ表現の自由という、これまでスウェーデンではむしろ「あたりまえ」とされてきた価値を共有しない若者が増え、外出時の女性の服装やデートにまつわる問題も起きている。排外主義はもってのほかで、「多様性の尊重」が重要であることは言うまでもないが、多文化・多民族化で大きく変貌を遂げつつあるスウェーデンが、これまでに経験していない課題に直面していることもまた事実である。

知的障害のある若者と性教育

福祉大国といわれるスウェーデンでも、知的障害のある人々に対する強制・強要された（あるいは非自発的な）不妊化手術が実施され、大舎制施設への入所が当たり前、抑圧的な社会的態度が存在する、という状況が20世紀前半まで続いたが、1970年代のノーマライゼーションやインテグレーションをキーワードとする社会改革を通じて、こうした状況が変化していった。今日では、成人するまでは親・きょうだいと一緒に一般家庭で暮らし、成人後は小集団のグループホームで自立生活を送るのが一般的である。

知的障害者の性行動・経験に関する先行研究を概観すると、知的障害のある女性について、様々な性的暴力・搾取の被害など、深刻な問題を指摘したものも多い。統計的には、性交経験よりも、マスタベーション、ハグ、キス、愛撫、ベッティングの経験が多く、「おつきあい」の経験はあっても、親になる知的障害者は少ない。

かつて、知的障害者といえば、「無性欲（エイセク

シュアル）」か「異常性欲（ハイパーセクシュアル）」な存在である、というのがステレオタイプ化された社会のまなざしであった。実際の「知的障害児者」というのは、障害の種類も程度も異なる、ジェンダーも、年齢も、民族性も、性的指向も、社会的階層も、その他についても様々に異なる背景をもつ人々であり、ひとりとして同じ人はいない。あえて言えば、抽象的概念の把握を苦手とする特徴があるため、言語的あるいはコミュニケーション能力に不十分な面がみられる。一般的に理解されている性にまつわる規範や記号あるいはシグナルを読み取るのが得意ではないと、困った状況に陥ることにもなりかねない。

多くの知的障害者が、性についても「皆と同じようにしたい、できるようにになりたい」と願っている。そのための、生涯を通じたサポートが必要とされている。

性教育をクリティークすることの大切さ

「知的障害者に規範から逸脱してほしくない社会」の中で暮らすということは、様々な困難を生じさせる。ロール（役割）モデルやオルタナティブな社会的あり方や「場」が欠如し、多様な（性に関連した）ライフスタイルが提示されることも少ない。知的障害児者が、同性愛者、両性愛者、トランスジェンダーとしてカムアウトすることが稀だということも、ジェンダーやセクシュアリティに関するステレオタイプや規範が根深い社会的環境と無関係ではない。

性教育は、障害のあるなしにかかわらず、性的指向や人種・民族にかかわらず、多様な存在が対象となる。「多様性の尊重」や「人権としての性教育」を扱う性教育者は十分な研修を受け、自身の価値観（ステレオタイプや差別・偏見、苦手意識を抱くものなどを含む）に自覚的でなければならない。異性愛規範・価値・考え方を見つめ直し、セクシュアリティをリスク要因としてではなく、人生や生活における重要な要素と認識することが重要である。

こうした規範や価値を見つめ直す手法を「批判教育学的アプローチ」(Critical Pedagogical Approach)という。知的障害のある若者やイスラム教徒、性的指向やジェンダー表現の多様な人々など、異なる若者集団に適した性教育のモデルを開発することに役立ち、包括的性教育と性の権利概念をとり結ぶものでもある。